

家族の体験発表②

## 不登校の本人の苦しみと周りの支援

### G.H. 氏 (保護者)

息子が高校2年になる春休みの講習の朝、なかなか起きない息子を感情的に怒鳴ってしまったことがきっかけで、息子は遅刻や欠席をするようになってしまいました。家族の誰とも、一言も話さなくなり、返事すらしなくなっていました。

起きない息子を私が怒鳴りつけることは、それ以前にも度々ありましたが、息子の中で、それまでの不満やストレスが、その朝、一気に弾けてしまったのかもしれない。

元々、人と話すのは苦手な息子でしたが、家庭ではよく話していたので、心を閉ざしてしまったことのショックは大きく、私自身も精神的にもしんどかったです。

それでもなんとか、登校させる気持ちを失わずに生活し続けられたのは、同年代の息子と娘の存在のおかげで、かなり救われていたと感じています。

単位、進級、自主退学などの不安で頭がいっぱいになり、息子との接し方を冷静に考えることができなくなっていきましたが、担任の先生は、時間をかけて息子の話を聞いて下さいました。息子は担任の先生には自分の気持ちを話していたようです。担任の先生は、私に対しても、息子がなんとか進級できるよう、病院で治療を受けてみることや、入院しながらの登校も可能だというアドバイスをもらえ、希望を持つことができました。

かかりつけの内科で相談したところ、「1回で病院に連れて来られると思わず、10回、20回と誘ってみて来ればいい」と言葉をかけていただき、焦ってばかりいた気持ちが楽になりました。後日、どうにか息子を診てもらった結果、健康面の問題は無く、精神科で思春期や不登校を診てくれ、入院施設がある病院で診てもらうことを勧められました。

やっと息子を札幌太田病院に連れて来た頃には、ほとんどの教科の単位が足りなくなっていました。息子自身も、何かのきっかけがなければ変わらないという思いはあったようで、入院することを受け入れてくれました。

入院の翌朝からは私が病院から車で送迎し、登校できました。会話は無いままでしたが、私の問いかけに頷いたり、首を横に振ったりして、意思の疎通はしてくれるようになりました。そういった小さな変化や前進を、病院のスタッフの方々が一緒に喜んで下さり、その日の息子の様子を教えていただけるのが楽しみで、元気づけられ、支えられ、息子を入院させてしまった罪悪感は少しずつ消えていきました。

入院生活を乗り越えていく息子をみていると、もしも進級できなかったとしても、別の方法を探してやっていける自信が持てたようにみえました。

約1ヶ月半の入院生活の後、自宅に戻ってからも、遅刻も欠席も一度もすることがなく春休みを迎え、春休み返上で毎日補修に通い、無事に進級することができました。

時々、起きられない朝もありますが、遅く起きても急いで支度をして間に合う時間に登校できています。